

サンタクロースの思い出



先日開催された理大祭ではサンタ企画が行われた。校内を歩くサンタクロースがプレゼントを配り、クイズに答えてサンタの家を見つけるとプレゼントをもらうことができた。大学生でもサンタからプレゼントをもらえるとは、本当にすてきな企画であった。

本来サンタクロースは、子どもがよい子にしているとクリスマス夜のプレゼントを置きにくる、赤と白の服を着て白い口髭をはやし、たおしいさんである。小さい頃は誰も



先日の開催された理大祭ではサンタ企画が行われた。校内を歩くサンタクロースがプレゼントを配り、クイズに答えてサンタの家を見つけるとプレゼントをもらうことができた。大学生でもサンタからプレゼントをもらえるとは、本当にすてきな企画であった。

その姿を見ようと必死に探したものだ。サンタクロースについては人それぞれ思いがある。サンタクロースにプレゼントとサインを求めた際、サインが母親の字だったり、また、サン

タクロースがクリスマス夜の夜に来ず、その次の日「世界中を回っていて届けられなかった」と印刷された手紙とともにプレゼントをもらったという話も聞く。今年もクリスマスもサン

タクロースは世界中を飛び回り、夢とプレゼントを子どもたちに届けるのだらう。夢とプレゼントを届けるには、時間もお金も労力もかかる。サンタさんお疲れ様です。(絵：川崎雄大)

VRアート



あいみさんがVRアーティストになったきっかけは、Googleが開発したVRお絵かきアプリ『Tilt Brush』の面白さに心を奪われ、描いた作品をSNS上で世界に発信したことがあった。

『Tilt Brush』は空間上、奥行きのある絵を描くことができ、さまざまな効果をつける事もできる。SNS上に作品をアップロードする際に、「作品が出来たとしても更に良くしたいと思う気持ちはもちろんあるが、他のアーティストより早く作品を世界に発信する事が大切だ」と考えているという。絶えず作品を発信していくその姿勢も、彼女の成功の要因と言える。

VRアーティストのせきぐちあいみさん

VR(仮想現実)への注目度は年々増しており、さまざまな分野での活用が期待されている。せきぐちあいみさんはVRを使ってアートを制作するVRアーティストとして活動している。今回そんな彼女にインタビューを行った。

SNSによる反響



あいみさんの作品を『Tilt Brush』のサンプル作品にしたいというGoogleからの連絡や、各地のイベントに来て公演してほしいとの要望が届いたという。クライアントは彼女の作品や活動を見て依頼をするため、あいみさん自身のやりたい方向性で仕事を出来るのがとても良い事だと教えてくれた。

ライブペイント



数少ないVRアーティストの中で、圧倒的な知名度を誇るせきぐちあいみさん。彼女の作品の魅力の一つは、ライブペイントだ。限られた時間の



▲ Tilt BrushのサンプルとなったVRアート =せきぐちあいみさん提供

中、観客の目の前で作品を作りあげていく。作品が出来上がる過程は、ダンスパフォーマンスのような躍動感であふれており、観客は釘付けになる。実際に観客の前でライブペイントを行うことこそ、自身を成長させるのだとあいみさんは言った。

VRアーティストとしての使命



彼女がVRで描いた作品は一つの世界になる。その世界をさまざまな場所へ運ぶことが、VRアーティストとしての

の使命なのだと言われている。あいみさん自身も楽しんで作った作品で、観客の心を動かすことが何よりも大切なのだ。難しいIT系のイベントでも、言葉でなく実際にパフォーマンスをする事で伝えられる事がたくさんあるという。これからの多くのイベント等で活躍が期待されるせきぐちあいみさん。彼女の活動に興味を持った読者はぜひあいみさんのツイッター等を見てほしい。考えもしなかったような作品に出会えるはずだ。Twitter@sekiguchaimi

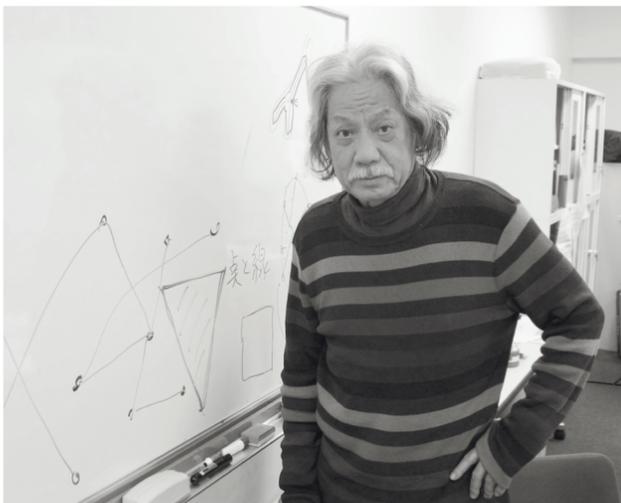
教授の歩き方

秋山仁 教授



秋山教授の学生時代

子どもの頃から数学が大好きで、数学と理科は得意科目だった。大学は本学の理学部応用数学科に進学したが、入学したのちに純粋数学に興味を抱いた。学生時代は、自分の理解のペースが授業と合わず、授業に出ないこともしばしばあり、自分で数学を勉強している方が能率的だと平日頃から感じていた。また、当時の理科大で数学や物理や化学を学ぶにあたっては周囲の大学よりも優れた環境であったと語った。そのような環境の中



▲取材を受ける秋山仁教授 =青木紀裕撮影

「多くの研究者は難しい問題を解くことに喜びを感じているが、それだけが研究の目的ではない」と語る秋山教授は、結果を中高生でも理解でき、かつ楽しい数学の研究を行っている。秋山教授は今の研究の道筋を見つけたのだ。で、秋山教授は今の研究が喜ぶべきものである。たとえば、フィールズ賞をとった研究はとも素晴らしくはないが、多くの場合、一般の人には理解されない。これは少しさみしいことだと秋山教授は言う。一般の人に喜ばれ、理解されることが重要であり、日常にありふれたものである。研究こそが、秋山教授が目指すものである。

数学を研究するということ

秋山教授はこれまで数学オリンピックの団長を務めたり、NHKの数学番組に20年間以上も出演したり、200冊以上の本を出版したりするなどさまざまな活動をしてきた。その上で、数学を退屈に感じる人に数学を心から楽しんでもらうのはとても難しいことだという。「日本は教育という点において、恵まれた環境にある。世界中で困っている人を、数学を通して支援したい。算数や数学の面白さを伝えていきたい。世界中を巡り、数学の『伝道者』になり、数学を通して人々を喜ばせたい」と語った。

秋山教授の夢

また、秋山教授は2人の研究者を尊敬していると語った。化学者のフアラデーと数学者のヒルベルトだ。どちらの研究者も身近なものに題材とし、深く掘り下げ新しい鉱脈につながるようなダイナミックな研究を行っていたという。

冬休みにぜひ読んでほしい本を紹介

ウィキペディア・レボリューション

—世界最大の百科事典は

いかにして生まれたのか

著者 アンドリュー・リー
著者 千葉敏生
出版社 早川書房



今日、インターネットを探索する上で、オンライン百科事典「ウィキペディア」に出会わないときはないだろう。雇用された専門家や、参加が義務づけられたユーザーがいるわけではなく、誰にでも編集ができる「フリー」な百科事典の秘密がこの本には書かれている。

この本には、インターネットの黎明期からウィキペディアの誕生を追う、何百万の記事を誇る人気サイトに至るまでの経緯が書かれている。ウィキペディアの歴史だけでなく、「五秒ルール」や「シャッター猫のパラドクス」、「ジャーナリストであるシーゲンソラーの事件」(ジャーナリストであるシーゲンソラーの誤った経歴がウィキペディアの記事に掲載されていた事件)などの珍項目を巡る議論が載せてあるのも興味深い。

さて、ウィキペディアの記事をそのまま自分の主張の根拠とすることができないことは、普段レポートを頻りに書く本学学生の立場ならよく聞く話だろう。それというの「フリー」なオンライン百科事典において、誰でも編集ができる代わり、専門家による校閲を廃しているため、記事の品質、つまり信頼性が確保できないのである。本書の著者が「コラボレーションを通じてプロフェッショナルとアマチュアの文化を融合させ、高品質でフリーな百科事典を作るのは難しい」と、結論づけているのは納得がいく。